第３章　大会誌に掲載された提言発表例

Ⅰ　県Ｐ研究大会誌、九Ｐ研究大会誌からの例

１　諫早市立飯盛東小学校ＰＴＡ（令和元年度九Ｐ研究大会福岡県大会大会誌）

過去の九Ｐ研究大会の「人権教育・特別支援教育」の分科会では、特別支援学級の取組や学校行事などの学校教育活動を、あたかもＰＴＡ活動のように発表する例が多くみられました。

しかし飯盛東（いいもりひがし）小ＰＴＡの場合は、ＰＴＡが主体となって学校の「人権教育・特別支援教育」を下支えするという今までにない提言発表でした。

子育て勉強会の案内文書を、封筒にあて名を手書きして保護者全員に送って参加者を増やす工夫など、各単位ＰＴＡが取り入れやすい工夫が満載の提言です。

活動を進める中で、インクルーシブ教育があるからこそ、すべての子どもたちに人としての優しさや思いやりの心を育めるのだということを参加した会員が実感し、深く学び合いました。

その強い思いと長い歩みが分かる「ＰＴＡが主体の人権教育・特別支援教育」の好事例です。

２　波佐見町立波佐見中学校ＰＴＡ（令和２年度九Ｐ研究大会くまもと大会大会誌）

くまもと大会第２分科会における討議の柱の一つは「できることから始める家族のコミュニケーション」でした。

波佐見中学校ＰＴＡでは、提言発表へ向けて新たな活動を起こすのではなく、長年実施してきた活動に「家族や地域とのコミュニケーションづくり」という視点から工夫を加えて、実践を進めました。

まず、今回の提言内容はＰＴＡ会則の中で、どの事業（ＰＴＡ活動）に該当するのかを、きちんと確認して工夫へつなげています。

このようにＰＴＡ会則に立ち返り、長年積み重ねてきた活動実績を充実させ、さらに新たな取組も加えた無理のない研究の進め方の好事例です。

３　諫早市立喜々津小学校ＰＴＡ（令和２年度県Ｐ研究大会南島原大会大会誌）

南島原大会は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、大会誌での紙上発表のみの大会となりました。

第１分科会「大人のつながりを深めることを目標とする分野」で、喜々津小学校ＰＴＡは広報活動を通して、会員へＰＴＡ活動について理解と協力を得る工夫に取り組みました。

その結果、ＰＴＡ活動を身近に感じる保護者会員が増えて、ＰＴＡ行事への参加や本部役員への積極的な参加協力が得られるようになったという好事例です。

４　雲仙市立南串第一小学校育友会（令和３年度県Ｐ研究大会五島大会大会誌）

五島大会は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、南島原大会と同様に大会誌での紙上発表のみの大会となりました。

第１分科会「大人のつながりを深めることを目標とする分野」で、南串第一小学校育友会は育友会活動の活性化を目指して、組織を縦糸と横糸に見立てて工夫しました。

ＰＴＡ役員が単年度役員ではなく、複数年度継続して活動を継続する利点を生かして、「参加は無理のない範囲で」のＰＴＡ活動を実践している小規模ＰＴＡの好事例です。

５　諫早市立長田中学校ＰＴＡ（令和３年度県Ｐ研究大会五島大会大会誌）

第２分科会「大人の学びを深めることを目標とする分野」で、長田中学校ＰＴＡは「長田やかん中学校」の実践活動を発表しました。

この活動は育友会会員に学校の施設を広く開放して、会員（保護者・教職員）相互の理解を深め子どもたちが喜んで登校できる楽しく活力ある長田中学校」づくりに努めることを目標に創設された活動です。

育友会研修部と本部役員が中心となって企画される活動ですが、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から、令和２年度と３年度は募集人数の縮小や活動の中止を余儀なくされました。

しかし平成８年度から始まったこの活動は、今後もしっかりと継承されていく大人の学びの好事例です。

第６分科会

人権教育・特別支援教育【共に生きる親力】

討 議 題　**他者を思いやり自分を好きになる子どもを育てる**

討議の柱
１．多様性を認め合う取り組み
２．子どもの自尊感情を高めるには

【討議題の趣旨】

一個人の人権の尊重と命の尊さ、基本的な社会性を身につけるためには、子どもへの接し方、子どもの個性（多様性）を認め、正しい知識を学び理解を深め、大人が子どもへの模範を示し、伝えることが重要です。

本分科会では、個性（多様性）を認め、双方で思いやる心、共に生きる「親力」を培うことで、子どもの自尊感情を高めるにはどうすべきかを討議を通して考えていきます。

【討議の視点】

１．多様性を認め合う取り組み
（１）人権意識への知識と理解の向上
（２）個性（多様性）の大切さ、命の尊さを学ぶ
２．子どもの自尊感情を高めるには
（１）子どもの目線に立った接し方

■提言者	長崎県諫早市立飯盛東小学校ＰＴＡ会長	山口　秀雄
	鹿児島県霧島市立横川中学校ＰＴＡ会長	福島　恭志
■指導助言者	長崎県教育庁生涯学習課課長補佐	馬場　利浩
	鹿児島市中央公民館長	常深　　透
■司会者	福岡県みやま市教育委員会主任社会教育主事	江上　靖則
■記録者	福岡県教育庁南筑後教育事務所社会教育室社会教育主事	井上　　章
	福岡県広川町立下広川小学校教頭	安達　幸子
■総括責任者	長崎県ＰＴＡ連合会長	山本　道雄
■運営責任者	福岡県みやま市立岩田小学校ＰＴＡ会長	藤木　亮次
■副運営責任者	福岡県広川町立広川中学校ＰＴＡ副会長	中瀬　春幸
■会場責任者	福岡県広川町立中広川小学校ＰＴＡ会長	氷室健太郎
■副会場責任者	福岡県広川町立中広川小学校ＰＴＡ協力委員長	中嶋　隆裕

第６分科会

＜子ども、親、先生への下支え＞

長崎県諫早市立飯盛東小学校
ＰＴＡ会長　山口　秀雄

１　はじめに

諫早市は、長崎県のほぼ中央部に位置し長崎・島原・西彼杵の各半島の結節部にあり、古くから交通の要衝として大きな役割を果たしてる。また、東は有明海、西は大村湾、南は橘湾と三方を海に囲まれ、北は多良山系を望み、四季折々の豊かな自然に恵まれている。

本校がある飯盛町は同市南部に位置し、人口7,100人程で高齢化が進む地域ではあるが、「地域の子どもは地域で守る」という意識が高い元気な先輩・保護者に守り支えられ、安心して子育てできる環境である。

【自然に囲まれた我が校】

児童数	285
会員数	237
学　級	11
支援学級	2

２　これまでの取組

特別支援教育に対する保護者の偏見があり、本当に支援が必要な子どもたちが支援を受けられない現状があると感じ、学習会を重ねてきた。特別支援でなく個別支援へと。

【平成２８年度作成ＰＴＡシャツ】

（１）平成２６年度～２９年度までの取組

	内　容	参加者
H26	「東小親学校」 長崎大学 吉田ゆり教授講演会	保護者 教員
H27	映画 「みんなの学校」 上映会	小学生 （4～6年生） 中学生 （全校生徒） 保護者 教員 地域
H28	「みんなの学校」 木村校長講演会	保護者 教員 地域 町外教員
	よろう会 （３回実施）	保護者
H29	支援学級保護者体験の勉強会	保護者 教員
	よろう会 （１回実施）	保護者
	支援学級活働 「ぬっぺパーリー」	支援学級児童 支援学級卒業生 保護者 教員 ＰＴＡ役員

【大阪より木村校長】

【ノンストップパワフル木村校長　講演会】

【ぬっぺパーリー　当日準備】

（2）成果

ＰＴＡ役員が支援学級の子どもたちに目を向けることにより、個別支援のあり方、支援学級の子どもたちの輝きと成長を見ることができ、その親への想いに共感できるようになった。

また、支援学級でなくても様々な要因で支援が必要になる子どもたちが多く、その親も不安を抱えていることがわかった。

（3）課題

支援学級の親の不安、支援学級以外の親の不安もどうすれば取り除くことができるか。親が育てたい子ども像と、子どもの育ちの現状とのギャップをどう埋めていくか。保護者の認めたくない親心、その気持ちにどうアプローチしていけばよいか。

３　平成３０年度の具体的な実践活動

（1）「カナッペパーリー」開催

平成３０年１１月１０日開催

①　支える対象

支援学級の子どもや悩み苦しんでいる親への支え

②　支援学級ＰＴＡ活動内容

本校ＰＴＡでは、ＰＴＡ会費から各学級4,500円の学級活動費を支出している。支援学級は、毎年子どもたちの学習（生活単元）：買い物・調理、対人等スキルとタイアップさせた学級ＰＴＡ活動を実施している。

③　内容

○支援学級児童で前日より買物や、おやつ作り等の準備をする。

○当日は支援学級児童、支援学級の卒業生や入学予定児童と、それぞれの保護者も参加し準備をする。

○バンド演奏を聞いて一緒に歌ったり、おやつを食べてたりして親睦を深める。

○前日、当日の参加者の写真をプロジェクターを使ってスライドショーを壁に投影する。

④　ＰＴＡの下支え

○会場の予約申請

○材料の共有
（提供できるものは持ち寄る）

○子どもたちと一緒に前日、当日準備

○前日及び当日の写真を撮り編集し、最後にスライドショー観賞

○後日編集してＤＶＤにして子どもたちにプレゼント

⑤　成果

○年に1度の再会の場で、成長を喜び合う、子ども・親・先生の姿に感動し、その感動を共有できたこと。

○大変と思うことも、たくさんの手で支えることで、参加者みんなが笑顔で達成出来ることを実感できた。

○子育ての悩みを共有し、親以外の保護者が関わることで、子どもたちへのその後の声の掛け方もより親しみが湧き、支援学級の授業参観に行く楽しみも増えた。

○ＰＴＡが下支えすることで親同士、先生との繋がりが深まり、先生が転勤されても悩みや楽しみを共有する関係も続きそ

の輪は広がっていくと思う。

⑥　**課題**

○先生が転勤され入れ替わりの年に、転出された先生と連絡を取り合いながら、人を繋ぐことを毎年続けること。

（２）子育て勉強会ＩＮひがし

親子であることを楽しもう

平成３１年２月１９日実施

①　**支える対象**

我が子の困り感のある行動に悩んでいる全ての親に対する支え

②　**開催に対するおもい**

兄弟同じように育てたつもりでも、違うのは当たり前である。頭では理解していても他の子との違いにどのように向き合い支えていくかは日々悩みながらだと思う。支援学級の保護者だけではなく、全児童の保護者に関連することである。子育てを色んな方向から考え、子どもたちへの対応に役立ててもらいたいとの想いで開催した。

③　**内容**

○始まりの言葉ＰＴＡ会長・支援学級担任の思いを語る

○ペアレントメンター２人のお話

○グループトーク

○各グループの思いを共有

○三線で癒されよう

○終わりの言葉　教頭先生

④　**ＰＴＡの下支え**

○会場予約申請及びペアレントメンター要請申請

○案内文書は支援学級担任と想いを併せ作成

○全保護者の目に入り確認できるように事務補助員が思いを込め手書きで宛名書きした封筒に入れて配布

○子育てに悩み、参加して欲しい保護者には、先生から参加要請

○託児は「飯盛地域共生助け合い隊に依頼（託児料金はＰＴＡより）

○グループで和やかに話が進むよう、コーヒー、じゃがちゃん（軽食）を準備

○ＰＴＡ広報誌の掲載記事と御礼の文書、報告書提出、ペアレントメンターへ交通費支払

【最後に心にしみる歌声】

⑤　**参加者の声**

［ペアレントメンターの声］

○医師の診断の有無に関係なく、その子に合った支援をすることが大切である。

○人はそれぞれ違うようにつくられているのに、比較をするから辛くなる。

○自分のことを好きだと言える子に育てよう。

○親の願いは子どもの笑顔、子どもの願いは親の笑顔、笑顔が安心の源。

【クループトーク】

［保護者の声］

○子どもと関わる時間が少ないことが、問題行動に繋がっているので、その子だけのスペシャルタイムを作り、良いところや成長しているところを褒めることが大事。

○子育ての悩みを聞いてもらい、楽になった。
○支援学校の情報交換ができて良か　った。
○子育ての悩みや辛さを話すだけで心が軽くなる･･･良いアドバイスが必ずしも必要なわけではない。
○聴く力を身につけた教師を目指したい。
○自分だけじゃないんだ。我が子だけじゃないんだ。
○障害じゃない。個性なんだ。
○人より成長が遅いだけなんだ。
○この会は「ストレス発散の会、愚痴こぼしの会、先輩親への相談の会」であった。

[先生の声]

○自分の想いや悩みを伝えるお母さん、その背中をさすりながら心を傾ける母さん、自分の想いと重ねながら話を聴くお母さん等々、温かいつながりにほっこりなった。また、支援学校に通うお子様のお母さん同士で、自分の子育てを明るく語る笑顔がなんとも楽しげで、とてもステキであった。

⑥　成果

○子育て体験談を聞いて、同じ悩みを持ち不安を抱えていても話すこと、共有することで心が軽くなる。
○周りの保護者は、良いアドバイスが必要とは限らない、聴くことも大切。
○先ずは親が健康で笑って子どもと接することが大切だと思う。

⑦　課題

○アンケートを取らなかったことが悔やまれた。参加者の心の声が聴けたかもしれない。
○定期的に開催して、心を軽くしてあげること。

４　これまでの活動を通しての成果

以前はインクルーシブ教育の言葉の意味さえも知らない実態であったが、映画「みんなの学校」を観て学び、木村校長の熱い想いを直接聞いて、その想いに後押しされ子育ての悩みや、疑問に思うことを共有する場所と時間を設定し、「よろう会」を実施した。

支援学級保護者の体験談を共有し、支援学級だけではなく全保護者に関係することと考え、ペアレントメンター体験談を元に、意見交換をして親の不安に共感し、支援学級の子どもたちと関わることで、多くの学びを得た。

子どもの個性を認め、子どもと向き合う親の覚悟、先生の覚悟、子どもたちの優しさを感じ、自ずと携わりたくなる感情へと変わっていった。

子育てをしていくなかでどんな親でも不安になり悩むことはあるはずである。不安を共有し多くの手で支え理解し合うことで特別ではなく個性と思えるようになった。

子どもたちは、インクルーシブ教育があるからこそ、より一層人としての優しさや思いやりの心を育み成長していたんだということが分かった。

５　今後の課題

これまでの活動を通し、学び成長してきたことを次世代のＰＴＡ会員へと繋げるためには何をすれば良いか。ＰＴＡとして、ＰＴＡだからこそできることを今後も続けていきたい。

第65回日本ＰＴＡ九州ブロック研究大会くまもと大会

第２分科会

家庭教育

～ 子どもたちの健全育成 ～

【討議題】

子どもたちの未来を育む豊かな家庭教育

【討議の柱】

１．親子が共に学べる家庭環境づくり

２．できることから始める家族のコミュニケーション

【討議題の趣旨】

家庭教育は、すべての教育の出発点である。

家族とのふれ合いを通して、基本的な生活習慣、人に対する信頼感や思いやり、自尊心や自立心、社会のルールなどを身につけていく上で重要な役割を果たしている。

家庭は、子どもたちが最も身近に接する社会であり、また心のよりどころとなるものである。少し立ち止まって家庭での日常生活を振り返りたい。

【討議の視点】

１．親子が共に学べる家庭環境づくり

① 子どもの成長に合わせた環境づくりとは

② 今、家庭ですべきこととは

２．できることから始める家族のコミュニケーション

① 子どもの本音を引き出す声のかけ方とは

② 子どもとの時間を作る工夫とは

第２分科会

生徒、家族と学びの共有、地域の人々との学び
～家族、地域の人々とのコミュニケーションを通して～

長崎県東彼杵郡波佐見町立波佐見中学校PTA
会長　長嵜　克己

１　はじめに

波佐見町は、長崎県のほぼ中央、東彼杵郡の北部に位置し、県内で海に接しない唯一の町である。人口は約 14,500 人、地場産業の陶磁器が盛んであり国内第３位を誇る。

近年それを観光に生かし 100 万人を超す観光客が訪れる観光地となった。町と産業と人の繋がりによって、協働し更なる発展を目指す町である。

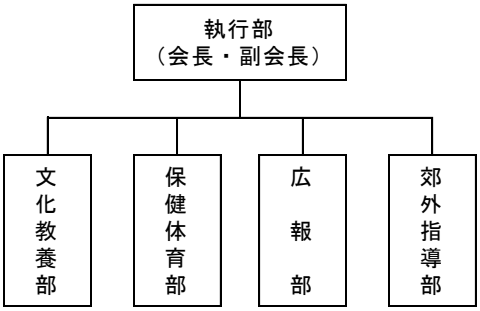
また、農業も盛んで、給食など地産地消を推進している。

【波佐見中学校校舎風景】

波佐見中学校ＰＴＡは、くまもと大会第２分科会「家庭教育」での提言にあたり本ＰＴＡ会則の第４条「事業」に示された６つの事業のうち「会員相互の研修と親睦」と「学校教育と連携した家庭教育の充実」の２つの事業に重点を置いて実践を深めることとした。

２　波佐見中学校ＰＴＡ活動の現状

保護者はＰＴＡ活動並びに学校教育活動に大変協力的である。保護者全員がＰＴＡへ入会をするとともに、ＰＴＡ行事や学校行事へ積極的に協力する。実践に当たっては専門部組織がそれぞれ中心となって企画運営を行った。なお専門部は、文化教養部、保健体育部、広報部、校外指導部に分かれ活動を行っている。



【波佐見中学校ＰＴＡ組織図】

３　家庭コミュニケーションづくりを支援するＰＴＡ活動の実践

ＰＴＡ会員家族のコミュニケーションが豊かになることを目指して、多くの活動を実践してきたが、その一部を紹介する。

（1） 親子交歓球技大会

① 実践内容

保健体育部が中心となり地区委員会も協力して、全会員を上げて実践している。

47 回を数え続いている歴史ある球技大会であり、毎年の活動ではあるが、改めて親子の会話づくりという観点から、勝負にこだわるより「親子で楽しくコミュニケーション」というキャッチフレーズで開催した。

② 成果

ア チームが親子で混成チームを作ることになっているために、お互いに声を掛け合いながらゲームを楽しんでいる。その楽しさを自宅まで持ち帰るので、家庭に帰ってから、例えば夕飯を囲むときに家族のコミュニケーションを深めることに役立つ大会となっている。

【表彰の様子】

イ 会員相互「大人どうし」の親睦を図る活動であると同時に、我が子の友人ともゲームを楽しむ中で大人と子どもの豊かなコミュニケーションが取れる大会である。しかしながら今年度は、コロナ感染拡大防止の観点から中止とした。

③ 課題

勝ち負けにこだわると、大会の途中あるいは帰宅してからも気まずい雰囲気になることが考えられるが、親子で仲良くゲームを楽しむという目的をしっかり示すことで、本大会が家庭教育支援の一助となるように努めていきたい。

（2）地場産業を活かした、文化教育活動

「波佐見焼を活かした、地域の人たちと生徒たちのコミュニケーション」

① 実践内容

やきもの文化体験は文化教養部が中心となって、学校の総合的な学習の時間としっかり連携した体験活動である。

波佐見町の主要産業は全国的に有名な窯業であり、保護者も窯業に関わっている者が多い。やきものには、「成形」「窯詰め」「窯焚き」「窯出し」と多くの工程作業があるため、授業時間だけではなく、土曜や日曜を利用して約半年間をかけて生徒に体験をさせている。

講師人材としては、文化教養部だけではなく保護者・波佐見中教職員、窯業科のある波佐見高校・有田工業高校の教員と生徒、窯業技術センター、教育委員会など多くの支援を受けて実践している。多くの皆様が大変協力的に関わってくださるので、長年続くＰＴＡ事業となっている。

【専門家との授業風景】

【国指定　畑ノ原窯跡史跡での窯焚き】

子どもの作品の出来不出来だけを話題にせずに、制作の過程で子どもが感じたことに保護者が耳を傾けるような啓発活動も併せて行ったことで、家族のコミュニケーションが深まる活動となった。

②　成果

ア　やきもの文化体験について感想アンケートを取ったところ、自分の親の仕事の一端を知ることで、やきものを介した親子の会話が弾むようになったという感想が多くみられた。

イ　体験の中で多くの関係者と携わることにより、その方々とのコミュニケーション力が向上するとともに、「学び」「考え」が持てる子どもたちに成長できた。

【文化発表会】

ウ　波佐見町主催の文化発表会の作品展示会場には、多くの会員が家族で詰めかけ盛況であった。

エ　子どもたち主体での作陶体験だが、保護者も加わり、一緒に作陶活動を行うことにより親子のコミュニケーション力が活性化した。

③　課題

ア　やきもの文化活動において、今まで以上に町内・町外に広報活動を行って親子と地域コミュニュティとの連携強化の一例としたい。

（3）今、向き合う生徒と保護者、向き合うメディア（ＳＮＳ）

「何が本当で、何が本物のコミュニケーションか見つける教育」

①　実践内容

ネット中毒という言葉が知られているように、過度のメディア依存は子どもの成長に有害である。

波佐見中学校の学校保健委員会は委員長がＰＴＡ会長であり、保健体育部が学校と連携して企画から実施まで精力的に活動している。

メディアについては、波佐見中学校携帯ルールがすでにあり、ＰＴＡと学校が協力して上手なメディアとの関わり方の指針を示している。

そこで、家庭においてメディアとの関わり方をしっかり話し合ってもらうことをねらいとして、子どもだけではなく親子で一緒に参加する保健講演会を開催した。講演議題は、『自分の心と体と生活を見つめ直し、改善実行する能力を養わせる～ネット社会との上手な付き合い方～』をテーマとして決定し、そのテーマに基づき第２回保健委員会において保健講演会を開催した。

講演の内容をごく一部であるが以下に紹介する。

メディアと“下手な”付き合い方をするとどうなるか。

・学力と成長に悪影響を及ぼす
・友達とトラブルになる
・ネット犯罪に巻き込まれる
・犯罪者になる

学力への影響に関してはスマホの使用を１時間以内にとどめることが上手な付き合い方と

いえる。今までにもメディアとの接し方について講演を聴いた保護者も多いと思われるが、ネットの世界は進化が著しく、子どもたちの方がどんどん新しいことを吸収し思わぬ使い方をしているものである。メディアの使い方については保護者も学習を怠ってはいけないと強く感じている。

② 成果

ア　保護者も一緒に参加できて、メディアとの関わり方を家庭で話し合えたことの感想が多く寄せられた。

イ　子どもにあれこれ言う前に、保護者自身も上手な使い方をしたいという感想が寄せられた。

③ 課題

ア　各家庭において、コミュニケーションの真の意味を子どもたちと正しく話し合えるか。

（4）薬物乱用防止教室への保護者の参加

① 実践内容

本ＰＴＡの事業である「学校教育と連携した家庭教育の充実」の一つとして、保健体育部ならびに校外指導部が学校と連携し、薬物乱用教室を保護者も一緒に受講するように企画した。

薬物乱用を防止するには、家庭に帰ってから子どもと保護者が話し合うことが欠かせないと考えたからである。3 年生の学校進路説明会と同日に開催することとし、保護者参加の便宜を図った。

【薬物乱用防止教室】

② 成果

ア　薬物乱用の怖さを、家族で話し合う良い機会となったと感想が寄せられた。

イ　豊かな家族のコミュニケーションを保って、親子間に心の隙間をつくらないことが何よりの防止策であることを、3 年生の親子と共有できた。

③ 課題

ア　薬物乱用に至る傾向は、コミュニケーション不足が一因という観点から考えると、保護者が危機感を真剣にとらえ、コミュニケーションを深める必要性を感じる。

４　今後の課題として

九州ブロックＰＴＡ研究大会くまもと大会での提言発表にあたっては、私たちは波佐見中学校ＰＴＡ会則に改めて立ち返り、先輩諸氏が築き上げた活動の意義を理解し、それらをいっそう充実させるとともに新たな活動を取り込みながら実践を重ねた。

健全育成事業では、外部講師を招聘し、保護者に対しても講演会など多くの学びの場を提供した。保護者がともに学ぶことで、子どもたちの健全育成に、素晴らしい効果を上げている。

なお今回の提言では詳述はしていないが、広報部は広報紙「ふれあい」を発行し家庭教育充実に関する特集を組むなどの活動をしており、波佐見中学校ＰＴＡが一丸となって取り組んできたといえる。

今後も全会員がＰＴＡ活動の目的をしっかり共有し、忙しい毎日の中でも充実した活動を推進していきたい。